

活動報告

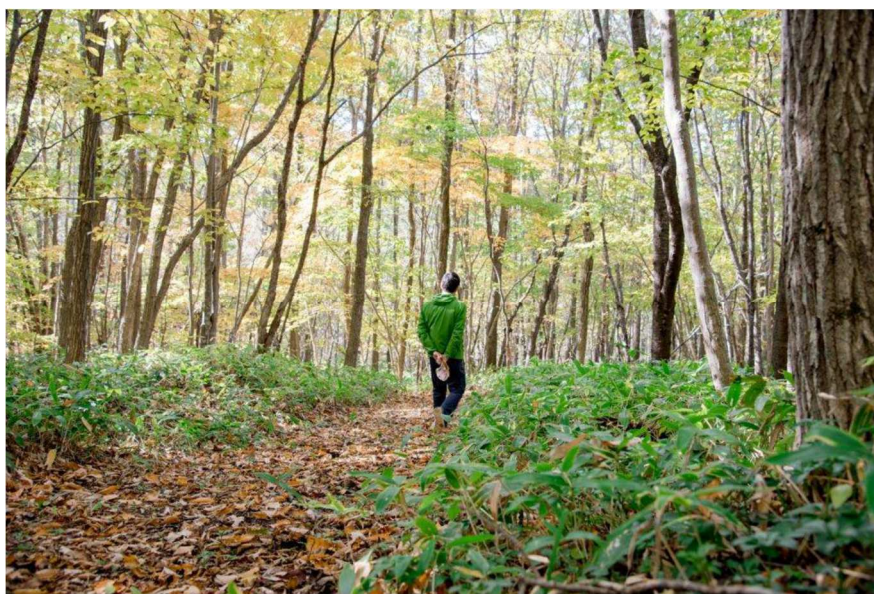
上厚真小学校からはじめるふるさと復興の森づくり

2019年～2020年

1 考え方

大規模に被害を受けた森林の復旧は、まちの復興を象徴するひとつです。

- 1) もとの森を将来に向けて住民および協力する遠くの人々の手で、長い年月をかけて育てていく
(一過性のイベントではなく、10年程度の時間をかけて行っていく)
(目指す森は、もともとの広葉樹林とする)
- 2) 被害を受けた森林は広大かつ危険で、その復旧等はプロの仕事であるため、市民による森づくりは身近かつ安全で象徴的な空間で行う
- 3) 将来にわたって長期的に「環境教育+防災教育」を行う場とする



2 概要

厚真の森づくりを、タネ採り～タネ播き～育苗～植栽の一連の活動を行いながら、ふるさとの自然環境と防災について学びつづけていく。

地域に根差す林業・水産業そして農業について学んできた小学生たちが、これら産業を支えている自然環境に視野を広げ、地域についての理解を広げ深めていく過程となります。

また、この活動は徐々に輪を広げ、地域の住民のみなさん、そしてボランティアや広域ネットワークでつながる他地域の方々との連携活動にもつながります。

○活動内容

実施日時：2019年10月25日(木)、2020年9月28日(月)

参加児童：6年生9名・5年生17名(2019)、5年生13名(2020)

協力：NPO 法人近自然森づくり協会、雪印種苗株式会社

(1) 森づくりのお話

NPO 法人近自然森づくり協会理事長の岡村俊邦先生から、森づくりの意義、多くの生きものが住むために必要な、その地域でのタネ採りから多様な広葉樹を植える方法などについて、お話を聴かせていただいた。



(2) 育苗

① 採種

学校周辺にもともとある林で、タネ採りを行なう。

〈採種地〉小学校の校庭、隣接した「げんきの森」

〈樹種〉サワシバ、ヤマモミジ、ミズナラ



② 種子精選

採取したタネ(球果、果実など)から種子以外の部分を取り除く。予め校庭で採取したキタコブシや、厚真町内で採取したカンボク・マユミ・ケヤマウコギ・ガマズミについて果実を布袋に入れて繰り返し踏んで、水洗いして果肉を取り除く。

水に浮くタネは、充実した種子ではないので、取り除く。ミズナラのドングリも浮くタネは除去。



③ 播種(中型～小型のタネ)

育苗箱には、前回同様の育苗用の貧栄養培土を入れ、精選した②のタネを、育苗箱に播く。

中型のタネであるサワシバやヤマモミジ等は、タネを均等に播いて、タネが見えなくなるくらい覆土し、その上に碎石を均等に並べる。また小型のタネであるケヤマハンノキは、先に培土に碎石を並べ、その上タネを播き、灌水してタネを碎石の間に落とす。



④ 播種(大型のタネ)

中型のタネであるミズナラ、コナラ、オニグルミについては、上記同様の貧栄養

培土を使って、ビニールポットに3 個ずつ播く。

⑤ ポットへの植替え（夏に播いて育てた苗）

前回、育苗箱に播いて発芽して育ったヤマグワの実生苗を掘り取り、ポット苗づくり。上記同様の貧栄養培土を使ってビニールポットに植えこみ、42 ポットの苗ができた。

⑥ 苗の育成

播種した育苗箱およびビニールポットは、冬季間除雪等の影響がなく、雪に埋もれる場所に設置した。

(3) 植樹

直径 3m のユニットを設定し、事前に防草シートを敷設しておいた。それぞれのユニットに、別々の樹種を 10 株植えていく生態学的混播混植法の手法で、胆振地方で採種して貧栄養で育成された苗 30 株をそれぞれ児童が選んで植えた。

グループ毎に、どこにどの苗を植えたか、植えたときの苗の高さはどれくらいだったかを記録用紙に記載した。

苗を植えると、エゾシカの食害に遭うことが多いので、ネットで防鹿柵を設置した。また、植えた苗がどのように育っているか確認するために、年 1 回、高さを測って記録していく。



今後も多様な樹種の苗の育成を継続していきます。

毎年、タネ採り～タネ播きを春と秋に行い、植樹は春か秋のどちらかで行います。

児童は一連の活動を通して学習し、長期間継続していくことで森づくりを体験・実感していきます。壊された地域の森を回復する活動に直接携わることで、郷土への想いを醸成します。この活動は、町内や周辺地域に広げていく予定です。

本活動は、クラブメッド・トマム基金および北海道いぶり基金の助成を受けて実施しました。